

越境するラストファーマイ タンザニア都市における社会宗教運動の展開

著者	石井 美保
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1998-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008399

越境するラスタファーマイ

タンザニア都市における 社会宗教運動の展開

石井美保

はじめに

ラスタファーマイ (Rastafari) とは、エチオピアアニズムとパン・アフリカニズムをはじめとするアメリカ・カリブ海地域産の黒人運動に起源をもつ社会宗教運動であり、その担い手はラスタファリアン (Rastafarian) あるいはラスタと呼ばれる (目次上の写真参照)。この運動は1920年代に興隆したマーカス・ガーヴェイの「アフリカ帰還運動」を思想的母胎とし、30年のエチオピア皇帝ハイレ・セラシエの即位を機にジャマイカにおいて誕生した。ラスタファーマイという呼称はハイレ・セラシエの即位前の名ラス・タファリ・マコネン (Ras Tafari Makonnen) からきている。

ハイレ・セラシエを黒人種の神として讃えるラスタファーマイは、全離散黒人のアフリカ帰還と白人中心世界の打倒を唱えて黒人貧困層の支持を獲得し、やがてラスタの主張を歌ったレゲエ音楽の世界的成功と信者の移民によって北米やイギリス、英領カリブ海諸島をはじめとする多くの「ディアスポラ世界」へと伸展していった。同時にこ

の運動は、アフリカに帰還を遂げた離散黒人のラスタによって伝道され、今日アフリカ諸都市で若年貧困層を広汎に含みこむ都市文化／共同体を形成している。本稿では筆者が1997年1月から9月にかけて行なった現地調査に基づき、タンザニアの首座都市ダルエスサラームにおけるラスタファーマイの発展動向について述べる。

1 都市出稼ぎ民の生活

まずはじめに、ダルエスサラームにおけるラスタファーマイの発展について都市状況との関連から考えてみたい。ここで一人のラスタファリアン、ジェムを紹介する。彼は1970年生まれ若者ラスタであり、15歳のとき内陸部ドドマ地方の農・牧畜村からダルエスサラームに出稼ぎにやってきた。現在、彼は都市中心部の路上で駄菓子などを売るキオスクを営んでいる。彼の一日を紹介しよう。早朝7時、ジェムは開店場所にやってくると歩道脇の定位置に屋台を運び、ほぼ全財産といえる商品の入った箱を隠し場所から担いでくる。その後、人目につくよう丁寧に駄菓子や絵葉書を並べ、店

番用のベンチを日陰に設置する。開店準備が終わると後はひたすら店番である。ジェムのキオスクには客以外にも多くの路上仲間が訪れるが、なかでも縄のれんのようなラスタ独特の髪型、ドレッド・ロックス (dread locks) を垂らしたラスタ仲間がやって来ると、彼らが「バビロン・システム」とよぶ政府官憲の悪行やラスタ同士の噂をはじめ、さまざまな情報が交換される。学校帰りの学生たちもジェムのベンチに座りこんでラスタもどきのスラングを用いるが、彼らがドレッド・ロックスを伸ばしたり、ラスタの「聖なる薬」であるマリファナを常用することはほとんどない。レゲエ音楽やドレッド・ロックス、「バビロン」「サバイバル」等の独特の語彙といった「ラスタ的要素」は若者層を広く含みこむ都市文化として流行しているが、運動の実質的な担い手はジェムのような都市貧困層である。昼過ぎになるとジェムは空腹に耐えて店番を続けるか、儲けがあれば昼食を食べに行く。ラスタの重要な戒律のひとつに塩、肉、アルコール類に対する食物禁忌があり、このためジェムは肉をいっさい食さないが、外食の際には料理に含まれる塩を摂らないわけにはいかない。さて夕方8時過ぎ、道路に人通りの絶える頃彼は店じまいを始める。儲けは日によってまちまちであるが、翌日のバス代さえ稼げないこともままある。そのような冴えない日には、ジェムはしばしばマリファナを喫煙しつつボブ・マーリーの歌を聴いて慰めとする。

ジェムのような小売業者たちは、政府によって税金を納めず路上を不法占拠している「インフォーマル・セクター」とされており、この違法性のゆえに彼らの生活は常に脅かされている。すなわち政府官憲による出店群の撤去、罰金徴収、逮捕等の取り締まりが日常的に行なわれるのである。なかでも小売の存続に壊滅的な打撃を与えるの

はダルエスサラーム市当局による市街清掃計画で、オノを持った破壊部隊と機動隊を引き連れた市当局のトラックが現れると小売業者たちは青ざめる。当局襲来の情報を得ると彼らはいち速く屋台と商品を安全な場所に隠すが、その間にも道路の向こう側ではオノ部隊が路上に取り残されたキオスクを破壊し、残骸をトラックに積み込んでいる。

政府によるこうした市街清掃作業はジェムらにとっては生存手段そのものの剥奪を意味する。路上から出店群が一扫された日、靴磨き職人である一人のラスタは「バビロン・ファイヤー！」と腹立たしげにつぶやいていた。

2 出稼ぎ民ラスタによる農場建設運動

このように政府官憲による弾圧や取り締まりに曝されながら路上で日銭を稼いでいる出稼ぎ民ラスタたちであるが、彼らはただ黙然と状況に甘んじているわけではない。彼らは単なる路上仲間からラスタの共同体として集結し、政府への積極的な働きかけによってその認可と援助を取り付けた。これが1997年3月から頻繁にマスコミを賑わせている、「ムビギリ・キャンプ」の農場建設運動である。

このキャンプはメンバーのほぼ全員がタンザニア人であり、かつ地方出身の出稼ぎ民であるという特徴を持つ。彼らは都市に生きるラスタの貧困・孤立状況の打開と、自然に即したユートピア建設を目標として、「バック・トゥー・ザイオン——都市を出て農場へ」をスローガンに農場建設運動を開始した。再三の申請によって1997年3月、ラスタたちは政府から1500²の土地譲渡を受け、モロゴロ地方ムビギリ村にラスタの農場兼キャンプを設立した。この運動はその後、飢えとマラリア熱により数人のラスタが落伍するなど労苦を重ねたが、人力での耕作と政府からの食料援助によって

現在のところ順調に存続している。

では、元来反体制的な対抗文化としての色彩を強く持つラスタファーライにとって、なぜ政府援助による農場建設が可能だったのだろうか。簡潔に言えば、この運動は政府によって「都市出稼ぎ民の農村回帰運動」として位置づけられ、貧困対策と連動した形で援助を獲得しえたのであり、ここでユートピア建設を目指すラスタたちの理想と、地方経済を活性化し都市出稼ぎ民の抑制を目指す政府の思惑とが合致したといえる。さらに脱部族主義と共同労働による農業共同体の建設という運動のスローガンは、かつてタンザニア国家建設の柱であったウジャマー社会主義の理想と酷似している。また、キャンプの様子は新聞やラジオ等のメディアによって頻繁に報道され、全国的に衆知されつつある。

このようにラスタファーライは現在、都市貧困層の具体的な生き残り策であるのみならず、政府援助の要請と地方への伸展といった積極的な活動によって「迫害から協調へ」の過渡期にあるといえる。

3 重層化するラスタファーライ

このように、タンザニアにおける運動の発展は都市社会状況と密接に関連している。しかしながらタンザニア国家内部に留まらず、広く大西洋を跨ぐパン・アフリカニズムとしてのラスタファーライの発展動向を見逃してはならない。

現在、運動はタンザニアに定住している離散黒人のラスタ（以下、帰還ラスタとする）とタンザニア人のラスタ（以下、タンザニアン・ラスタとする）の双方によって推進されている。運動内部ではたして両者はどのような関係を取り結び、そこにはどのような問題が現れてくるのだろうか。

この点について、帰還ラスタによって創設され、タンザニアにおけるラスタファーライの草分けとなったムベジ・ビーチ（以下、ムベジとする）を例としてみてみよう。ムベジでは、毎週土曜日にラスタの集會が開かれている。この集會の内容を簡単に紹介したい。土曜日の朝9時過ぎ、ラスタたちは近郊から三々五々集まってくると重々しく挨拶を交わす。彼らの多くはざっくりとしたタム（毛糸の帽子）を被り、王の勺を象徴する杖を手にはしている。集會所となる裏庭の大木には皇帝ハイレ・セラシエの肖像、そして黒人讃歌「エチオピア、汝、我が父祖の地」の歌詞が貼り付けられている。屋内から太鼓が持ちだされ、円を描いて陣取ったラスタたちは一定のリズムを叩き始める。音楽に合わせて皆が口々に詠唱し、歌の節目には「ジャー！ラースタファーライ！」という荘嚴な合唱が響きわたる。

このムベジではジャマイカで作成されたラスタの戒律である「ナイヤビンギ・オーダー」に則り、ハイレ・セラシエ崇拜や白人に対する忌避、女性への戒律などが遵守されている。ここで注意すべきことは、この集會に参加しているタンザニアン・ラスタのほとんどが独立以降のタンザニアに生まれ育ち、植民地経験はおろか白人と接する機会もほとんどないにもかかわらず、「白人打倒」や「アフリカ帰還」といった離散黒人の信念を共有している点である。このことは帰還ラスタとタンザニアン・ラスタとの関係について、興味深い傾向を示唆している。すなわち、タンザニアン・ラスタは帰還ラスタと密接に関わり運動を推進していく中で、奴隸制に関する歴史認識や反白人意識、アフリカの神聖化といった「離散黒人」特有の問題意識と視点を獲得していく。このことはいわば、離散黒人がラスタファーライを介してアフリカ人を「啓蒙」し、離散黒人を主体とする意識的な黒

人運動へと導いていくことを意味する。

離散黒人とアフリカ人との関係のこうした複雑さは、帰還ラスタとタンザニアン・ラスタそれぞれの語りからも窺える。たとえば帰還ラスタの長老であるラスT（ラスは敬称）は、アフリカを「神の地」として礼賛する一方、アフリカ人が「西欧に安易に迎合している」ことを嘆く。また、ロンドンからの帰還ラスタであるラス・マシングはアフリカにおける割礼や傷痕文身といった「悪しき因習」の廃絶を目指し、アフリカ人の「歴史への無知」を批判する。このように帰還ラスタがアフリカ／アフリカ人の「後進性」を非難するとき、逆に彼らは自分たちが後にしてきたジャマイカやロンドンにおける運動の先進性と離散黒人ラスタの闘志を讃え、より「質の高い」運動を求めて西欧世界とアフリカとを往復する。ここで帰還ラスタはイデオロギーとして反西欧主義とアフリカ礼賛を唱えているにもかかわらず、その活動実践と思考の基盤は西欧世界のメトロポリスにある、という矛盾した状況にあるといえる。

このような帰還ラスタに対し、タンザニアン・ラスタはどのような視線を向けているのだろうか。タンザニアン・ラスタは一般に、帰還ラスタを「運動の真正な知識を継承する者」として尊敬し、またときには彼らの経済力を利用して運動を展開している。このように帰還ラスタの「先進的」な思想と活動に依拠する一方、タンザニアン・ラスタは帰還ラスタを「金持ちの外国人」、ときには「白人」とさえ呼び、「貧しいアフリカ」における「われわれ純粋なアフリカ人」という連帯意識からは排除している。

つまり、帰還ラスタはタンザニアン・ラスタを「遅れてきた同胞」であると見なし、彼らを啓蒙

して鋭い歴史認識と反西欧意識をもつディアスポラ的な視点へと近づけようと試みる一方、離散黒人こそが闘志をもった「真のラスタ」であるとしてアフリカ人を差異化している。これに対してタンザニアン・ラスタは西欧世界に基盤をもつ帰還ラスタに憧れつつも、彼らを「アフリカの現実を知らない外国人」として排除している。このように、パン・アフリカニズムの一環として「全黒人種／アフリカ人」の団結と統一を主張するラスタファーライの内部にあって、離散黒人とアフリカ人とは共に運動を推進しつつ、同時に言語、国籍、価値観、そして経済格差といったさまざまな差異によって分断されており、互いに「包摂しつつ排除する」という両義的な関係をとり結んでいることがわかる。

むすび

アフリカにおいてラスタファーライは、ジャマイカにおける運動の系譜を継承しつつ、独自の展開を遂げている。運動は膨張するアフリカ都市社会状況を反映し、貧困層による社会的実践の動向と共同体の形成過程を提示するとともに、ディアスポラ世界のみならず独立後のアフリカにおいて、エリートの視点からではなく街角のレベルでパン・アフリカニズムを再考するための有効な実例ともなっている。今後、ラスタファーライはタンザニア内でどのような政治的位置を担っていくのか、また他の宗教集団とどのような関係を結びうるのか。さらに国境を越える運動の連帯と出稼ぎ民の移動とはどのような関係にあるのだろうか。これらの問題について、今後ともタンザニアを中心に検討していきたい。

(いしい・みほ／京都大学大学院)